

曹洞宗 蟠龍山 護国院 芳全寺

芳ほろれん蓮

2026 年新年号

かならず非器なりと思うことなかれ

依行せば必ず証をうべきなり

令和8年新年

No. 6



大本山永平寺不老閣猊下・南澤道人禅師拝問

[特集] 高祖大師御征忌・報恩法脈会
於 大本山永平寺別院長谷寺

「不説過戒」 大本山永平寺東京別院

道元禪師御征忌・報恩法脈会「教授師」体験記

文 荒木 龍胤

昨年の大本山永平寺御征忌での焼香師に引き続き、今年は大本山永平寺東京別院御征忌・法脈会での「教授師」

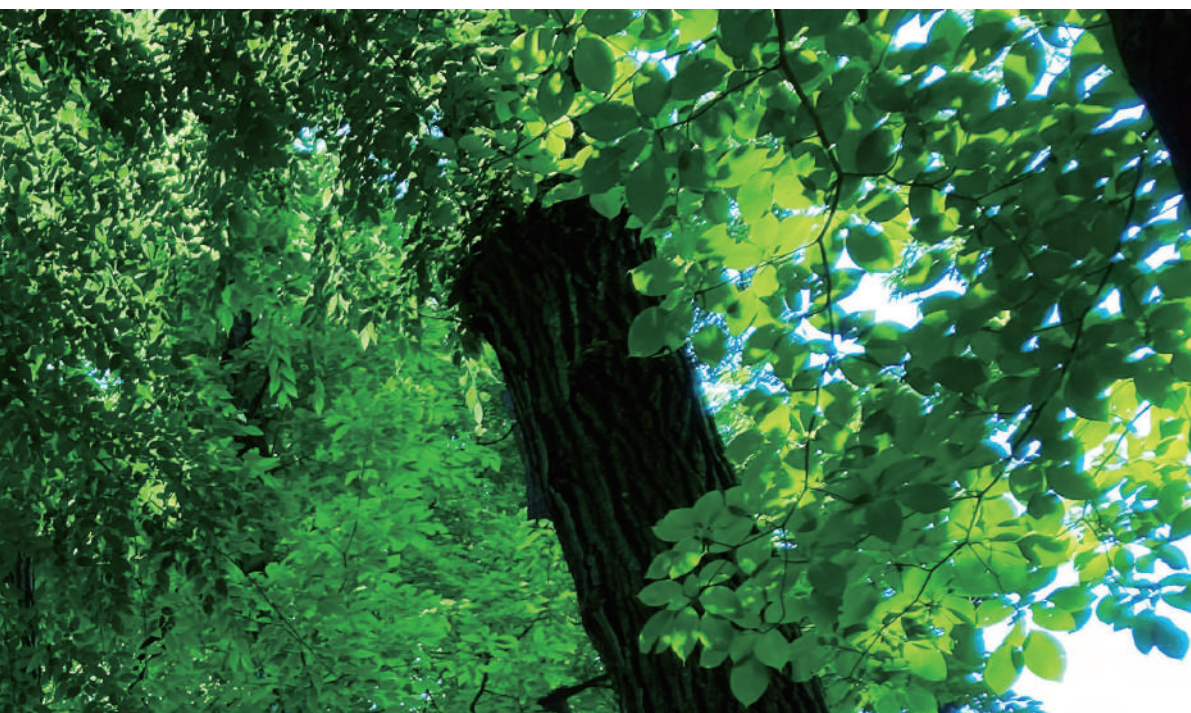
のお役目を拝受させていただきました。このような大きなお役目が二年連続で続くのは一体どうしたことなのか・・・と戸惑いつつも、これも自分に課せられた一つの天命と覚悟を決めて取り組むしかないのでありました。

「教授師」とは、法脈会（授戒会）という、宗門における最高の儀式法要において、戒師様（今回は大本山永平寺貫主・不老閣大禪師様）の補佐導師として、お仕えするお役目の二師（教授師、引請師）の内の一人になります。昨年の焼香師は一つの法要での導師のお勤めのみでしたが、今回の二師のお勤めは御征忌・法脈会中（東京

別院では三日間）のほぼ全ての法要にそれなりの立場でのお勤めとなりますので、なかなか大変なお役目となりました。

まず、体調、体力にそれなりの堅調さが求められます。各法要中には、「お拝」という所謂、五体投地型での礼拝の所作が頻繁に入ります。多い場合には、一法要中に三十回を超える場合もありますので、一日だと軽く百回以上となります。膝や腰に不調があったのでは、なかなか務めきれなくなってしまうます。そういう私は、脚力には比較的自信がある方でしたが、案の定、二日目には大腿部が筋肉痛になってしまいました。

また、広い本堂で、マイクなしで朗声を響かせなくてはならない場面もありますので、喉の調子も気になる所です。とにかく、代役のいないお役目なので、事前



からの健康管理、体調、体力管理にはこのほか、気を遣う必要がありました。

各種の法要の内容については、一般地方寺院ではまずやらない、特殊な法要ばかりとなりますので、事前の学習と修練が必要になります。「授戒会」の解説書を一から読み込み、二師の進退所作等についての情報を集めました。また、東京別院には、東京別院なりの本山作法、というものがあり、参考本とは違っていたりしますので、直前での確認が必要となります。そのほとんどの内容が、初めて体験する「ぶつつけ本番」的となりますので、内心の緊張を隠して涼やかに演じるのはなかなか大変でありました。法要の一座、一座、肝を据え、落ち着いて務めきることに集中いたしました。

幸いにも、二師の侍者（サポート役）の方々に頼りになるベテランの方が多く、多方面に亘ってご援助を頂くことが出来、何とかそれなりに役目を終えることが出来ました。誠にありがたいことと、心から感謝申し上げます。

さて、肝心の話は法脈会（授戒会）の中身についてとなります。法脈会とは、お釈迦様からの正伝の仏法の中で私たち現世を生きる者がしっかりと守るべき特に大事な決まり事（戒律）の中の十六項目について、伝授する儀式会となります。この十六項目の戒律のことを菩薩戒といい、これを伝授されることで人は菩薩の位に入る、とされるのであります。実は、曹洞宗では誰でも亡くなった後の葬儀式において、略式とはなりますが、当儀式を行っております。

今回の東京別院での法脈会は、このお釈迦様から幾世にも亘って連綿と伝えられたこの仏法を【死んだあとではなく、生ある内に】曹洞宗の最高位であられる大禅師猊下から直接伝授される、という最高の法要となります。正伝の仏法とのご縁、大禅師猊下とのご縁が結ばれる、という意味になります。

今回、ご縁があつてこのような有難い大法要において、「教授師」という大禅師猊下のサポート役をさせて頂く機会を

不說過戒とは他者の過ちを責め立てない、あらさがしをしないということ。

自分の正義を他者に対して過度に振り回さないこと、他者にも仏心があり、それを信じて待つ、常にリスペクトの気持ちで接すること、少々の不義は許せる、こころの【ゆとり】、【あそび】、というものがスキルとして求められているように思います。

得たことは私の人生においても、実に得
難い、最高の時となりました。改めて、
当法要の中心テーマである、十六条の戒
律（仏戒）、というものについて、自己点
検の良機ともなりました。そこで、ここ
では、その中の一つを取り上げてみたい
と思います。

「不説過戒」というもの

不説過戒^{ふせつがかい}とは、十六条の戒律の中にあ
る十重禁戒という十の戒律の中の一つ、
六番目に示されている重要な戒律になり
ます。簡単に言えば、「他者の過ちを責め
立てない、あらさがしをしない」という
意味になります。私たちは日頃、えてして、
他者の失敗をあげつらったり、自分の正
しさを一方的におしついたりしがちでは
ないでしょうか？

正義感の強い人、常に完璧を求めてし
まう人など、要注意のようですね。正義
も完璧もそれ自体を見れば「善」なので
しょうが、人と人との関係性においては、
えてして緊張感、ギスギス感を生む要因
にもなるものです。

常に他者を批判したり、理屈っぽく自
分の正論を主張する人は、周りから好か
れませんね。こうなると、いろいろな物
事がうまく運ばなくなったりして何かと
苦勞するものです。私も以前はこの傾向
が強く出てしまうことがあり、職場の人
間関係において、幾度も失敗したりした
ものです。

百人いれば、百通りの正義、物差し、
というものがあり、それは微妙に一人ひ
とり違った基準だったりするものです。
要は、その物差しを振り回して、他者を
安易にジャッジすることは慎もう、他者
にはその人なりの都合・成長のペースと
いうものがあり、たとえそれが自分の基
準から外れることであっても必要以上に
干渉すべきではない、という戒めとなり
ます。

大禪師猊下は今年の告諭において、
永平寺二祖懷奘^{えいしょう}禪師さまのお言葉から
「和合和睦^{わごうわぼく}」を示されました。すべての人々
は、仲良く、力を合わせて共に支え合おう、
という精神です。実はこれはすべての人に



高祖大師正当献供出班



請拜式

とって、人生の究極の目的、課題と言ってもよいくらいの「難題」ですね。私たちは、実に些細なことで他者と言い争ったり、いがみ合ったりしがちです。他者への誹謗中傷を趣味にしているのかな、というような方も見受けられます。本当は皆、安らぎと幸せな未来を望んでいるはずなのに、感情のまま、逆の行動（後に自分が他者から責められる因となる）をしたりしています。他者とは、自分とは違う価値判断をもった独自の人格です。

自分と他者とのそのような違いを越えて、仲良く、和合和睦していくことは、実はかなりのスキル、配慮が求められる事であり、それなりの努力が必要となります。国と国との関係なども同様と言えるでしょうか。

「過ちは責められるべきだ」、「指摘してあげることが愛だ」、「不正は厳しく裁かれるべきだ」、当然に議論はあるでしょう。これらは無論正論です。現代の社会風潮もそのような流れですね。

正論・・・しかし度を越しては私たちが求めている「安らぎと幸せ」から遠ざかっていくのではないのでしょうか。自分の正義を他者に対して過度に振り回さないこと、他者にも仏心があり、それを信じて待つ、常にリスpekトの気持ちで接すること、少々の不義は許せる、こころの「ゆとり」、「あそび」、というものがスキルとして求められているように思います。

「不說過戒」、実に深い意味をもった戒めだと思います。大禪師猊下が望んでいることは、誰もがこの戒めを守り、人と人とが和合和睦して生きていける、平和な世界の実現です。一歩一歩、そこに近づくために、自分自身に出来ることから始めてみたいものですね。「不說過戒」、是非、柔らかな気持ちで他者に接していただけますように。

蟠龍山芳全寺住職 荒木 龍胤

合掌



壇上礼・佛祖礼



高祖大師御征忌・報恩法脈会 於 大本山永平寺別院長谷寺



戒弟集合



壇上礼・佛祖礼



懺悔道場



御導師先導



啓建歎仏

十月二七日～二九日にかけて、道元禅師様の御命日を偲ぶ「御征忌」の法要と、道元禅師様がお授け下さった戒法をお受けする「法脈会（授戒会）」の法要に随喜して参りました。

修行を終えてからも、毎年長谷寺の御征忌には随喜しており、私自身その度新たな役割を頂戴し全うしているので、今年は二師侍者寮という新しい配属です。師匠が教授を務めるということでのサポートのため配属になりました。サポート役といっても、全く分からない法要もあったため、一から勉強し、経験豊富な同郷の先輩和尚に教えを請い、本番を迎えました。



因脈授与



不老閣下御親香



相見の拝



順列・巡堂



庫院の様子

～長谷寺山内での流れ～

前日（10月26日）

- ・ 16:00 上山 諸準備
- ・ 17:00 薬石（夕食）
- ・ 18:00 進退習儀
- ・ 19:00 寮舎の先輩和尚と会食
- ・ 22:30 開枕（就寝）

御征忌当日（10月27日～29日）

- ・ 4:15 起床
- ・ 4:50 暁天坐禅（早朝の坐禅）
- ・ 5:50 法堂朝課
- ・ 6:30 小食（朝食）

以後二師（教授師・引請師）

法要随喜（毎日10法要程度）

夜は寮舎の方や、同安居との
会食（これが楽しみでもあります）



説戒（仏堂にて）

いざ三日間が始まると、目の前の法要を滞りなく進行させるために、導師（二師）の動きを確認しながら頭をフル回転させ、終われば次の法要の確認と息をつく暇もなく、怒涛の連続でした。しかしその中で、同じ二師寮の先輩和尚方は皆気さくで、逆に私がサポートされていた感じでした。

修行中も感じたことですが、色々な立場を経験すると、点と点が繋がりが線になるように法要のことが分かります。年に一度の行持ですが、次回のような役目を頂いても今回の二師侍者寮の経験は活かすことでしょうか。

終了後、多くの御寺院様から「お師匠さん堂々としていたね」と。それを聞いてホッと帰路につき、いつの間にか深い眠りに落ちていました。

徒弟 荒木玲音 合掌

「参加して脈法恩報 忌征御」文稿寄

大本山永平寺別院長谷寺で曹洞宗の年に一度行われる大切な法要が営まれ、

当寺の荒木住職が教授師という重責を担われるということで（詳しい内容については一切理解しておらず）参加してまいりました。

地下鉄の表参道駅からの骨董通りは懐かしく、根津美術館や外国盤レコードを買った事など学生時代を思い出しながら、しかし朝七時の受付に間に合うよう速足で汗を拭き拭きやっとの思いで無事長谷寺に到着できました。

七時四十分、「迎聖諷經」。私たち仏様との縁を結ぼうとする者の為に仏様をお迎え入れるための読経らしいです。

九時三十分、「説戒」。仏堂に場を移して説法を拝聴いたしました。説戒師様は岩手県の報恩寺老師様で若い頃大本山永平寺で厳しい戒律の下修行された方でした。修行の一環で全国のお寺に派遣され、多くの寺の多くの住職に仕えたそうです。その時の様々な経験、住職様との「縁」繋がりがご自身にとってその後の人生に多大な影響があり、

とても有意義だったと仰っておられました。

十一時、「順列・巡堂」。いよいよ昼食です。時間に追われて朝食はそこそこ済ませていましたので「やったー」という気持ちで、でも過度の期待はせず食卓の準備が出来るのを待ちました。

食も修行のうちとは聞いてはいましたが食卓に着く前に長谷寺の伽藍の中にある仏様に挨拶をして回る「順列・巡堂」を行いました。食事は想像よりはるかにおいしく量・質ともに大満足でした。

十四時三十分 本日二度目の「説戒」。説戒師様は大本山永平寺貫主、南澤道人禅師様です。御年九十九歳になられるそうですが、そのお声には張りがあり、また私凡人にもわかり易い語り口での説法でしたので助かりました。仏様と私達との「縁」というような難しい話ではなく、極日常の人と人との「縁」についての内容が主でそのような「縁」を大切にすることの重要性を説かれました。私なりに理解できたと思っています。

少しの休憩時間を利用し、芳全寺の荒木住職のお計らいで永平寺貫主 南澤道人禅師様と面会し、親しくお茶を頂戴する時間を持てたことはとても有意義だったと感謝しています。

時間はあっという間に過ぎ「因戒」の授与です。私は一日のみの因戒というコース（？笑）でしたので今回はこれで終了です。思ったより早く終了したので、今度はゆっくり骨董通りを戻り、青山通りを渋谷駅まで学生さん達と一緒に歩いてきました。普段は一切思い出さない学生時代を懐かしみながら。

今回の法要のお誘いを受けて最初はあまり乗り気ではありませんでした。一日の参加で荒木住職には大変申し訳ありませんでしたが、説法でお聞きした 極日常の人と人との「縁」をこれから大切に生活していこうと思わせてくれた今回の機会に感謝いたします。

道元禅師って どんな人？



5 入寂

- # 曹洞宗を開いたお坊さん
こうそじょうようだいし
- # 高祖承陽大師と尊称されている
- # 永平寺を建立する

前回までのお話

京都での活動が困難になった道元禅師は、弟子たちともに移った越前の地にて永平寺を建立し、「威儀即仏法、作法是宗旨」の教えを徹底、日常の行い全てを修行と捉える規律を確立。

- この永平寺建立によって法灯を後世に伝えるための確固たる基盤ができたものの、自らを律し
- 続け、厳しい真実の仏法を保ち、民衆を教化し
- ているうちに病に侵されてしまいました。

入寂の時

病状は次第に重くなり、建長5年(1253年)ついに永平寺の住持職を第一の弟子である孤雲懷奘禅師に譲られました。療養のため、道元禅師は京都へ赴き、俗弟子であった覚念という人物の邸宅に滞在されましたが、治療の甲斐もなく、同年道元禅師は54歳(満53歳)の生涯を静かに閉じられました。その入寂に際し、道元禅師は次のような遺偈を残されました。

- **五十四年、第一天を照らす**
- **箇の跳を打して、大千を触破す**
- この遺偈には、生涯をかけて仏道を追求し、徹底された禅師の境涯と、生死を超えた安らかな心境が込められていると言えるでしょう。長年説き続けてこられた「生死すなわち涅槃」という教えを、まさに自らの死をもって体現されたのです。

さいごに

道元禅師のご生涯は、幼少期に抱いた無常観から始まり、真実の仏法を求めて比叡山での研鑽、そして遠く宋の国への渡航、天童如浄禅師との出会いと「身心脱落」という決定的な悟りの体験、帰国後の興聖寺、そして越前の永平寺における教団の確立と、『正法眼蔵』に代表される深遠な教えの説示に至るまで、一貫して純粹で妥協のない求道の姿に貫かれていました。

- 道元禅師の遺された曹洞宗の教え、そして『正法眼蔵』をはじめとする数多くの著作は、時代を超えて多くの人々に影響を与え、精神的な支えとなってきました。現代社会が抱える様々な問題や、個々人が直面する苦悩に対し、禅師の言葉は、今もなお新鮮な示唆と解決への糸口を与えてくれます。その教えは、ただひたすらに、真摯に自己と向き合うことから始まるのです。

時代に寄り添う お寺の在り方（後編）



貞昌院ホームページ

芳全寺徒弟 荒木玲音 33歳
 東北大学卒・玉川大学卒
 一般企業に勤務後、
 令和3年大本山永平寺別院
 長谷寺にて安居
 仏教を分かりやすく伝えるため勉強中

今回の対談は前号に引き続き、横浜市港南区にある天神山貞昌院住職である亀野哲也師です。宗門の発展に大きく貢献され続け、またご自坊での様々な活動を通して檀信徒の布教教化に邁進されている方です。多様なご経験から導かれるこれからの時代に即した布教のあり方を考えていきます。

海外で感じたこと

徒弟玲音（以下玲音） 亀野住職は總持寺や宗務庁※でも長らくお勤めされていたのですよね。

当時はどのようなご経験をされていたのか教えて頂けますか。

※宗務庁・曹洞宗宗務庁のこと。
 曹洞宗の寺院を包括する法人を宗教法人「曹洞宗」といい、その事務所を曹洞宗宗務庁という。

亀野哲也師（以下亀野） 總持

寺では電算室といって本山も

コンピュータ化していく部署の経験や、禪師様の本葬儀や晋山式など宗門行持で行う際に事務局を作って、一年前から準備を行って運営したりしていました。また宗務庁では級階査定委員といって全国一万四千家寺全の規模を算定し宗費を決める役目も長らく務めていました。

玲音 多岐に渡ってご活躍されていたのですね。また国際布教にも携わっていたとかお見かけしたのですが、海外ならではの布教の在り方の違いは何か感じられた経験はありますか。

亀野 今は宗務庁に国際課があるのですが、当時はまだ組織がありませんでした。ハワイや北米、南米など歴史が長い所で布教をされて帰ってきた方々とSOTO禅インターナショナルという組織を作りました。布教に

How to do Zazen



曹洞宗にて運営されている SOTOZEN.COM
海外の方にも禅を知って頂くきっかけに

なのです。移民がきっかけで神社やお寺ができたため、日系一世、二世くらいは日本と同じように法事を行っていたりしたのですが、世代が変わっていくにつれ先祖供養よりも、禅を求めて坐禅をする。信仰は別に持ちながら坐禅をやりたいという方が多いと感じました。

玲音 海外の方への布教のことと、お寺を身近に知ってもらうことは共通項があるように感じ

ます。人によってニーズが多岐に渡るからこそできる限りお寺は応えていく。これが大切なのですね。最後に、私を初め青年僧侶へのアドバイスを頂けると嬉しいです。

お寺こそ柔軟に

亀野 お寺はやりようによって

は何でもできる可能性を持つていると思います。伝統というのは変わらないものだと思いますが、お寺こそ一番柔軟性があると感じています。お寺自体場所によって、国によって全然違いますよね。そしてお墓の形も10年、20年と経てばまた変わっていきます。なので時代に合わせて、柔軟に変えていくのが良いと思いますよ。

玲音 曹洞宗としての信仰など変えてはならないところは維持しつつ、ということですね。



亀野哲也（かめの てつや）60歳

天神山貞昌院 住職

早稲田大学理工学部を卒業後、都庁にて建設、施設計画の業務に従事。大本山總持寺にて安居した後、SOTO 禅インターナショナル事務局長、宗務庁級階査定委員長、宗務庁広報委員等歴任。平成24年より貞昌院住職となる。

亀野 そう考えています。その前提の上で時代によって変えていくのが良いのではないのでしょうか。

玲音 「お寺こそ柔軟に」というのは意外に感じましたが納得感があります。ニーズのところに話が戻るのですが新しいニーズを感じられることはありますか？

かしてあげたいなと思い協力し始めた所、定期的に開催されるようになりました。

玲音 なんと！まさに多様なニーズに応える事例ですね。亀野住職の柔軟なお考えと経験を組み合わせた取り組みには大変勉強させていただきました。本日はありがとうございました。

亀野 コスプレイヤーの方が撮

影したいというのがあって、定期的に場所を提供するようになりました。いくつものお寺から断られたことを聞いて、なんと



コスプレ撮影の際のライトアップ風景。可能な限り要望に応えるという。

※ココフリより画像引用
<https://cocofuri.net/basic3/teishoin/index.html>

完



特派布教会

令和七年六月九日、栃木県宗務所主催の特派布教会（教場・閑空院）に住職と徒弟の両名で参加してきました。

秋田県永泉寺住職の猪俣老師によるご法話から慈悲の心は他者だけでなく、自分自身をも救う力があるということを学びました。

教化指導員研修会

令和七年七月四日、曹洞宗宗務所主催の研修会に教化指導員の玲音が参加し、「寺院活動を考える」をテーマに、全国の宗侶と学び合いました。

大施餓鬼会

令和七年八月七日、大施餓鬼会法要を教区ご寺院様ご協力のもと厳修しました。ご参列頂けなかった方のためにも当日の様子を記録に残しました。ぜひご覧ください。

関東地区有道会栃木大会

令和七年十一月十二・十三日、関東地区有道会栃木大会が鬼怒川にて行われ、会員の玲音が運営に携わりました。

関東各県から百八十名を超える宗侶の方々にお集まり頂き、能登の現状・復興の協議、お寺として行える防災のあり方などを共に学び合いました。

摂心会

令和七年十二月二日、青年会行持の摂心会に玲音が参加して参りました。呼吸を整え、心を整える坐禅に打ち込み、修行の大切さを再認識しました。

社会貢献活動

当山では社会貢献活動としてボランティア活動や非営利団体への支援を継続して行っています。

- ・おてらおやつクラブ
- ・公益社団法人ハタチ基金
- ・認定NPO法人キッズドア等

2026年の回忌法要早見表

1 周忌	令和 7 年 (2025) 逝去
3 回忌	令和 6 年 (2024) 逝去
7 回忌	令和 2 年 (2020) 逝去
13 回忌	平成 26 年 (2014) 逝去
17 回忌	平成 22 年 (2010) 逝去
23 回忌	平成 16 年 (2004) 逝去
27 回忌	平成 12 年 (2000) 逝去
33 回忌	平成 6 年 (1994) 逝去

※休日は混み合いますので、お早めにご相談下さい。

編集後記

寺報「芳蓮」第六号をご覧頂きありがとうございます。今回は大本山永平寺別院での御征忌・法脈会での記録を兼ねてボリューム増でお届けしました。毎年随喜しているこの行持ですが、今年は師匠が教授師ということでもいつもと異なる見方ができました。当日の様子が伝われば幸いです。

また本号で「道元禅師ってどんな人？」の連載は完結しました。記事を作る過程で道元禅師の生涯に触れ、学びの多い連載でした。

荒木玲音